

つなぐ・広がる

今渡北小学校は、全校児童の24%の外国籍児童が在籍しています。従って、日々の指導は、多文化多様性に対応できる指導力が求められます。「通じない」場面が毎日、毎時、毎秒(?)ある中で、先生方の「捉える力」「育む力」によって指導方法は様々です。前回、外国人児童生徒教育に携わる教員の資質である4つの力を紹介しました。国際教室（日本語指導）での「捉える力」「育む力」の見方・考え方を紹介します。

【新1年生】 29名

見方 捉える

- ・日本語〇
- ・集中時間短い
- ・指示理解×
- ・経験がない

※テレビや漫画等

見ない。

遊びが違う

見方 育む

- ・見ること
- ・聞くこと
- ・順番が分かる
(順番を守る)



どのように日本語指導をするか

①一斉の取り出し指導

ペアワーク・グループワークのような場面で
意味交渉が生じるところに「習得」のチャンスがある。

②良質な「日本語」のインプット

ロールモデルは学校にしかない。

③授業のユニバーサルデザイン 3要素+動作化

- 焦点化（シンプル）・・・・・・指導内容を絞る。
※時間短縮ができる。 問いや指示を精選する。
- 視覚化（ビジュアル）・・・・・・学習内容をイメージしやすく。
- 動作化（モーション）・・・・・・言語理解・意味理解をしやすく。
- 共有化（シェア）・・・・・・学習者間で、学びを確認・拡散する。
※アウトプットができる。



【考え方】 この写真から分かる「聞く」姿は100点です。

4月、指導者が「こだわる」指導は、「聞くこと」です。目を向けてしっかり聞いている姿を褒めます。「日本語を聞く」ことができれば褒められる意識を植え付けながら、子ども達の日本語を聞く力を育てています。

彼らの特性を捉えると、聞く姿勢を整える指導から入るより、目的に向かう近道といえます。学級の外国籍児童に、どんな力を「育み」たいですか。そのために、彼らをどのように「捉え」て指導を始めますか。